

女子学生の意識の変化

—城西女子短大生の7年間の軌跡—

後藤 敏夫

1. はじめに

城西大学女子短期大学部（以下「本学」と略称する）は、昭和58年（1983年）4月に開学し、本年度の入学生は、第8期生に当たる。第1期生（1983年4月入学、85年3月卒業）が2年生に進級したとき、本学の教員の有志が、共同研究としてアンケート調査を試み、「城西大学女子短期大生の意識構造」という報告書を「城西大学女子短期大学部紀要」（1985年1月）に発表した。この調査は、本学の第1期生が、日頃の学生生活をどのような態度で送っているか、またそれをどのように感じているか、その実態と意識を分析することにより、その特徴を位置づけ、合わせて今後のよりよい学園生活の環境づくりと教育指導上の参考に資するために行ったものであるが、これを第1期生に止めず、その後も継続して毎年、2年次の学生について実施することとした。本年度で7回目の調査を行ったことになり、その都度、共同研究の報告書として発表してきたが、ここいらで、7年間の軌跡を省みて、本学学生の意識にどのような変化が起きているかを検討してみることにしたい。

この調査の当初の陣容は、筆者のほか、駒崎 勉、堀江 光、中沢亘子、佐藤規子、藤田主一の6人で、アンケート様式的设计、調査の実施、集計、分析、執筆をそれぞれ分担した。当初は、アンケート調査の結果を手集計で行うなど極めて原始的手法に頼らざるを得なかったが、当時の学生数は現在の半数以下（1学年265名）であったので、何とか処理することができたのであった。しかし、18歳人口の急増期に際して、第4期生から臨時定員増が行われ、学生数が倍増されたのに伴い、コンピュータによる集計を行うこととした。共同研究のメンバーにも出入りがあり、86年から現在の陣容（筆者のほか、堀江 光、中沢亘子、島崎規子、藤田主一、井上敏博、和田美智子）となっている。特に和田助手が参加されてから、コンピュータ集計のための解答のカード化や集計のプログラミング等に改善が行われて、集計時間の大幅な節約が実現した。

このアンケート調査の内容は、数回にわたり検討改善が加えられ、現在では次の5つの観点から構成されている。

- (1) 基本属性（通学形態、通学所要時間、こづかい、友人関係、アルバイト歴等）

(2) 大学や学生生活に対する基本的意識（進学理由，大学生生活の満足感，生き甲斐，クラブ活動等）

(3) 男女の役割や職業に対する意識（男女の社会的役割，就業予想年数，職業の選択等）

(4) 教師や講義に対する意見（講義の評価，受講態度，試験，ゼミナール等）

(5) 日常生活の実態（教養，趣味嗜好，スポーツ，行動パターン等）

これらのうち，主として意識構造に関連する部分について，過去7年の調査結果を検討して，どのような変化が起きているかについて，述べてみたい。なお，便宜上，第○期生の意識として，個々の年次を省略することとしたので，各期生の意識の調査時点は次のとおりと理解されたい。

第1期生（1983年4月入学，1984年前期に調査）

第2期生（1984年4月入学，1985年前期に調査）

第3期生（1985年4月入学，1986年前期に調査）

第4期生（1986年4月入学，1987年前期に調査）

第5期生（1987年4月入学，1988年前期に調査）

第6期生（1988年4月入学，1989年前期に調査）

第7期生（1989年4月入学，1990年前期に調査）

2. 大学や学生生活に対する基本的意識

(1) 本学への志望動機

第1期生から第3期生までは，「本学を何によって知ったか」を調査し，第4期生以降は，より具体的に「本学への志望動機」を調査しているが，その推移をみてみよう。

第1期生が本学を知ったのは，「先生」からの情報が各専攻とも第1位で，「広告・ポスター」「進学関係の本・雑誌」がそれに次ぎ，「親」からの情報の割合は低い。ところが第2期生になると，「進学関係の本・雑誌」が各専攻とも50%をこえて第1位となり，「先生」「知人・先輩」がこれに次いでいる。第2期生の段階では，前年度の実績が評価され，受験雑誌等への紹介記事も多くなり，学生自身の選択と「先生」等からの直接的な紹介が相互に反映された形となったのであろう。第3期生の場合も，この傾向は続いている。

第4期生からは，具体的な本学志望の動機について調査したが，各期の上位3位までは，次のとおりである。

第4期生 ① 希望する学科があった。② 推薦入学できるといわれた。③ 他になかった。）

第5期生 ① 推薦入学できるといわれた。② 希望する学科があった。③ 他になかった。）

第6期生 ① 希望する学科があった。② 推薦入学できるといわれた。③ 他になかった。）

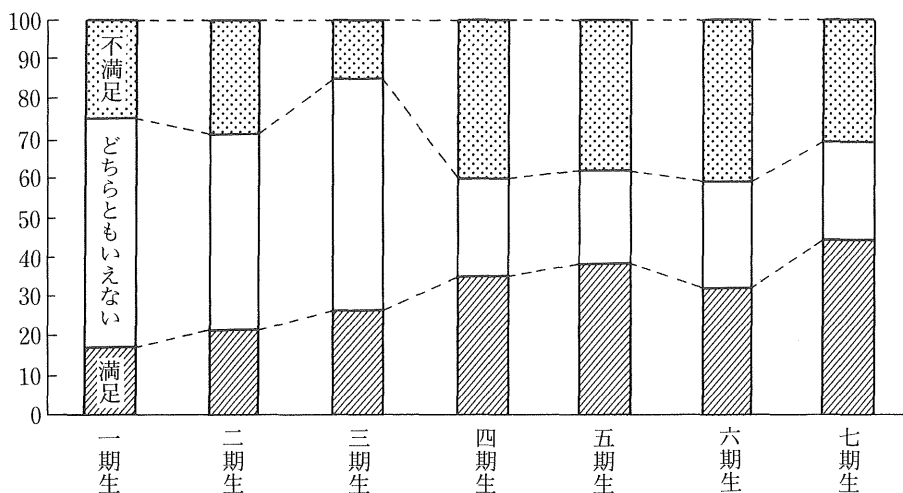
第7期生 (① 希望する学科があった。② 他になかった。③ 推薦入学できるといわれた。)

これによると、若干の前後はあるにしても、希望する学科と推薦入学が主たる志望動機であることがわかる。そして、各期とも、「4年制大学に併設だから」というのが、第4位を占めているのは、注目されてよい。専攻別にみると、「希望する学科があった」は、経営実務専攻（以下「J」を略称する）と秘書専攻（以下「H」と略称する）に多く、「他に入学できる大学がなかったから」は日本文学専攻（以下「N」と略称する）と英米文学専攻（以下「A」と略称する）に多かった。

(2) 大学生生活の満足度

次に、大学生生活の満足度について、『率直に言って、現在の大学生生活に満足していますか』という質問に対して、「満足」「どちらともいえない」「不満足」の3肢選択に整理してみると、その結果は、次のとおりであった。

第1図 大学生生活の満足度(%)



これによると、多少の出入りはあるが、学生の大学生生活に対する満足度は、着実に増加していることが分かる。特に、7期生の場合には、「非常に満足している」(6.7%)「ほぼ満足している」(37.0%)で、満足度の計43.7%は、過去の最高の数値を示している。これを専攻別にみると、J(43.7%)、H(54.6%)、N(36.5%)、A(40.6%)となっている。次いで、その不満足度についてみると、J(33.5%)、H(18.2%)、N(32.4%)、A(41.2%)となっており、Aの不満足度が満足度を上回っていることが注目される。

(3) 生き甲斐

学生が最も生き甲斐を感じていることは何かについてみると、7年間の推移は次のとおりであ

る。

第1表 最も生き甲斐を感じてきたこと (%)

| | 1 期 | 2 期 | 3 期 | 4 期 | 5 期 | 6 期 | 7 期 |
|----------------|------|------|------|------|------|------|------|
| 一般教養科目の勉強 | 0.0 | 0.9 | 0.3 | 0.9 | 0.5 | 1.0 | 1.0 |
| 専攻・専門科目の勉強 | 2.8 | 2.9 | 2.4 | 4.8 | 6.2 | 3.6 | 4.2 |
| 哲学・人生などの問題追及 | 2.4 | 3.2 | 2.2 | 1.9 | 0.8 | 1.0 | 1.5 |
| 社会経験や教養を養う | 16.1 | 16.2 | 16.4 | 7.8 | 5.4 | 4.5 | 6.9 |
| クラブ活動など | 9.5 | 10.1 | 13.2 | 20.5 | 13.6 | 16.2 | 14.9 |
| 友人との交際 | 43.0 | 41.6 | 44.8 | 36.0 | 46.4 | 44.2 | 49.4 |
| 学生生活のエンジョイ | 22.7 | 21.6 | 17.8 | …… | …… | …… | …… |
| 先生とのコミュニケーション※ | …… | …… | …… | 0.7 | 0.5 | 0.1 | 0.3 |
| 家族とのコミュニケーション※ | …… | …… | …… | 0.4 | 0.3 | 0.7 | …… |
| 趣味・娯楽※ | …… | …… | …… | 13.1 | 14.0 | 12.8 | 9.9 |
| アルバイト※ | …… | …… | …… | 6.5 | 5.4 | 7.3 | 5.2 |
| 就職活動※ | …… | …… | …… | 0.4 | 0.8 | 0.7 | 0.8 |
| その他 | 3.5 | 3.5 | 2.4 | 7.0 | 6.1 | 7.9 | 5.9 |

(注) ※印の項目は、第3期までの「学生生活のエンジョイ」という項目が抽象的なもので、より具体的な項目に再設定したものである。なお「家族とのコミュニケーション」は、第7期から削除した。

第1表をみると、学生が最も「生き甲斐」を感じてきたのは「友人との交際」で、7年間を通じて、常に最高位を占めている。そして、初期には極めて低い数値しか示さなかった「一般教育科目の勉強」「専攻・専門科目の勉強」が徐々に増加傾向を示しているが、その反面、初期に比較的高い数値を示した「社会経験や教養を養う」が半減以下となっているのが注目される。これは、「クラブ活動など」が微増していることと関連しているとみることもできる。なお、「就職活動」に熱意がみられないが、これはこの調査の時期が、2年次の年度当初であるためであろう。

3. 男女の役割や職業に対する意識

(1) 男女の役割

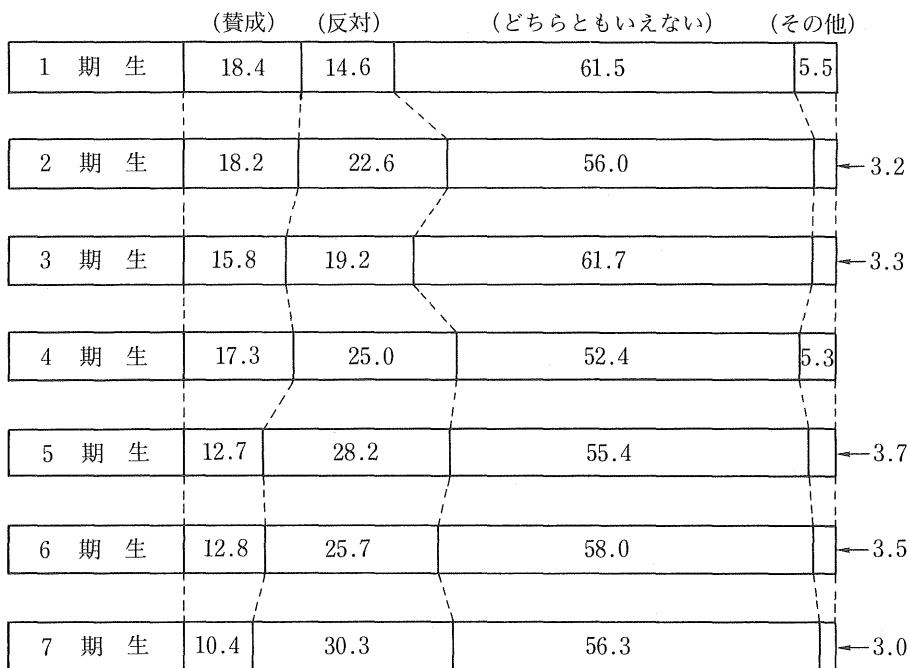
「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」という考え方に対する質問を設けたが、この質問は

女子短大生にとって自らの社会的位置づけや、性役割についての認識を知るうえにきわめて注目されるものである。その回答の7年間の推移は、第2図に掲げたとおりである。

これによると、積極的に意見を述べない（どちらともいえない）が、過半数をこえている傾向には変化がみられないが、この意見に賛成するものは、明らかに減少しており、反対を表明したものが激増していることを読み取れる。すなわち、1期生と7期生を比較してみると、賛成が18.4%から10.4%へと半減に近く、反対は14.6%から30.3%へと倍以上に達している。これは「男女雇用機会均等法」の制定等にともない、学生に男女同権の思想が着実に浸透しつつあることを示しているものと思われる。

ちなみに、7期生の結果を専攻別にみると、賛成はNが最も多く、以下H.A.Jの順となっており、反対はAが最も多く、以下H.N.Jの順となっている。期によって、その順位は若干異なっているが、総体的にみて、Nに賛成が多くAに反対が多いのは、専攻の学科の特徴を表しているとみてよいのであろうか。今しばらくその推移を見守る必要があると思われる。

第2図 男女の役割について「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」という人がいます。あなたは、この考えをどう思いますか。(%)



(注) この図で、(その他)とあるのは、無回答および二重回答等の欠測値である。

(2) 就業予想年数

本学の短大生が、卒業後の人生設計のなかで、自分の就業年数をどれぐらいのものと考えているかを聞いた質問に対する結果は第2表のとおりである。

第2表 あなたは自分の就職についてどのように考えていますか (%)

| | 1 期 | 2 期 | 3 期 | 4 期 | 5 期 | 6 期 | 7 期 |
|----------------|------|------|------|------|------|------|------|
| 就職するつもりはない(※1) | …… | …… | …… | 0.5 | 1.2 | 0.7 | 0.5 |
| 2～3年は働く | 7.9 | 10.5 | 11.2 | 9.2 | 10.9 | 9.8 | 7.7 |
| 5～6年は働く | 4.2 | 3.5 | 4.1 | 6.2 | 7.1 | 7.0 | 7.7 |
| 結婚まで働く | 23.0 | 28.2 | 26.5 | 26.8 | 34.7 | 31.5 | 34.8 |
| 出産まで働く | 8.4 | 10.9 | 10.1 | 8.6 | 17.8 | 21.3 | 22.3 |
| 子供が生まれても働く | 6.7 | 7.0 | 6.0 | 5.3 | 12.8 | 12.1 | 12.1 |
| 結婚相手と相談して(※2) | 36.8 | 27.8 | 30.2 | 29.8 | …… | …… | …… |
| 一生働く | 8.8 | 7.4 | 4.5 | 8.1 | 9.4 | 10.7 | 8.7 |
| その他 | 4.2 | 4.7 | 7.1 | 5.4 | 6.0 | 7.4 | 6.2 |

(注) (※1)は4期から付け加えられた回答肢で、(※2)は4期までの回答肢である。「その他」には、3期までは「就職するつもりはない」を含み、4期以降はそれを独立させたので、それ以外のたとえばM型(子育て後、再就職)等の回答の%であるが、5期と7期の場合は、これに若干の欠測値が含まれている。

これをみると、第4期までは「結婚相手と相談して決める」が圧倒的に多数を占めているが、この回答は、自分の判断を避けていることに外ならないから、第5期からは削除したのである。したがって、これを除けば、「結婚まで働く」が各期とも第1位を占めており、職業生活よりも家庭生活を優先する意向の強いことを示している。これは、「出産まで働く」が、第5・6・7期で第2順位を占めていることからもうかがえる。しかも、この傾向が最近ほど顕著になっていることが注目される。たとえば、第5期以降「結婚まで」と「出産まで」の合計が過半数を越え第7期のごときは、それが57.1%に達している。しかし、これを顕著な意識の変化とみることは妥当ではないと思われる。それは、第4期までは「結婚相手と相談して……」が多数を占め、そのなかには当然「結婚まで」「出産まで」が含まれていると見るべきだからである。一方、「子供が生まれても働く」が第5期以降、倍増に近い数値を示している事実があり、僅かながら職業生活と家庭生活の両立を志向する者が増加しているとみることができる。

(3) 職業の選択

学生が「どんな職業につきたい」と考えているかを設問したが、第2期までは、自由回答方式とし、第3期以降は用意された業種、職種の回答肢にチェックさせたため、全体としての経緯の図表化は困難である。第1期・第2期では、業種として金融業、旅行業、証券業、マスコミ等を

志望するものが多く、職種としては一般事務が圧倒的多数であった。第3期以降の希望業種についてまとめたものが、第3表である。

第3表 希望業種 (%)

| | 3期 | 4期 | 5期 | 6期 | 7期 |
|----------------|------|------|------|------|------|
| 製造 | 15.9 | 11.5 | 8.5 | 12.8 | 11.4 |
| 卸・小売(含商社・百貨店) | 12.2 | 11.5 | 14.5 | 15.5 | 13.2 |
| 銀行・信用金庫 | 7.4 | 6.5 | 6.3 | 9.8 | 10.7 |
| 証券 | 14.8 | 15.3 | 10.7 | 11.2 | 9.5 |
| 保険 | 6.3 | 6.7 | 5.3 | 6.6 | 8.0 |
| 教育(教員・事務員) | 3.1 | 5.5 | 3.3 | 1.9 | 1.7 |
| 情報処理サービス | 4.0 | 2.5 | 5.9 | 4.8 | 4.4 |
| 新聞・放送・出版・広告 | 9.9 | 9.0 | 11.5 | 9.8 | 12.2 |
| 観光・旅行(含ホテル・航空) | 12.5 | 15.3 | 15.3 | 12.6 | 14.6 |
| 公務 | 8.8 | 6.5 | 5.6 | 2.6 | 3.5 |
| その他 | 5.1 | 8.5 | 13.0 | 12.0 | 10.7 |

これによると、各期によって若干の差はあるとしても、学生に人気のある業種は、製造業、卸小売業、観光・旅行業、証券業であることがわかる。しかし、各業種について子細にみると、製造業、証券業、公務が低落傾向を示し、卸・小売業、新聞・放送等のマスコミ業が上昇傾向にあることを読み取ることができる。これは、経済社会の動向を敏感に反映した意識の変化とみてよいであろう。

次に、第3期以降の学生の希望職種についてまとめたのが、第4表である。

これによると、各期を通じて一般事務が圧倒的多数を占めており、以下営業事務、秘書の順で他の職種を希望するものは、いずれも4%以下である。これは、就職に際して、何処に所属するかが優先し、何をやるかは二の次とする伝統的な考え方が根強いことを示しているといえるかもしれない。しかし、これも子細にみると、若干の意識の変化を読み取ることができる。それは、第1に一般事務を志望するものの比率が若干ながら、年々減少しつつあり、第2に営業事務を志望するものが増加しつつあることである。つまり、抽象的な一般事務より、営業の第一線で働こうとするものが、漸次増えつつある傾向が出てきたということである。ここに、僅かながらも職業意識の高まりをみることができるといえよう。

第4表 希望職種 (%)

| | 3 期 | 4 期 | 5 期 | 6 期 | 7 期 |
|----------|------|------|------|------|------|
| 会計・経理 | 4.5 | 3.2 | 3.5 | 5.4 | 4.4 |
| 営業事務 | 10.5 | 13.9 | 13.1 | 18.7 | 17.4 |
| 販 売 | 4.8 | 3.9 | 4.7 | 5.3 | 4.4 |
| コンピュータ操作 | 2.2 | 3.7 | 3.8 | 4.7 | 4.5 |
| 外務・外交 | 3.8 | 2.5 | 3.5 | 2.8 | 4.0 |
| 秘 書 | 8.6 | 6.0 | 3.3 | 6.1 | 6.2 |
| 教 員 | 2.9 | 3.2 | 1.1 | 1.6 | 1.0 |
| 学校事務 | 3.8 | 2.5 | 2.0 | 0.6 | 1.5 |
| 一般事務 | 50.6 | 47.3 | 42.9 | 40.3 | 40.0 |
| その他 | 8.3 | 13.4 | 17.5 | 14.6 | 16.6 |

なお、専攻別にみると、一般事務を別として、Jでは営業事務が高く、Hでは当然ながら秘書が高い数値を示している。教員志望は、N、Aの文学科学生に限られているが、年々減少傾向を示しているのは、教員への就職難を反映しているものと思われる。

次に「男女雇用機会均等法」の制定・施行にともない、第4期生から、新たに「あなたは就職するにあたって男性と同等の業務を希望しますか」の質問を設けた。これは、雇用に際して男女の差別が禁止されたことにともない、企業ではいわゆる「総合職」と「一般職」という職種を設定し、前者は外国駐在、地方転勤、長時間残業等が予想される職種とし、後者はそれらがほとんど予想されない職種として、採用時にどちらかを選ばせる方式を導入するところが増加していることをふまえた設問である。単的にいえば、キャリア・ウーマンとして男性と同等に働きたい女性は「総合職」を、そうでない女性は「一般職」を選ぶであろうという前提にたった方式で、ある意味では巧妙な男女の区別を誘導するシステムであるといえよう。そこで、本学の学生が開かれた均等な男女雇用機会にどう対処するか、いわゆる「総合職」にチャレンジしようとする意識があるかどうかをみようを試みたのである。その結果は、第3図のとおりであった。

これによると、「是非やりたい」「できればやってみたい」の積極派と「あまりやりたくない」「絶対やりたくない」の消極派との比率は、第4期生で35.2対41.8、第5期生で32.5対40.0、第6期生で34.9対39.7、第7期生で35.9対39.4となっており、消極派が徐々に減っていく傾向を示している。ここにも、僅かながら女子学生の職業意識の高まりを読みとることができる。

時あたかも、労働省は本年8月13日、「コース別雇用管理に関する研究会」がまとめた報告書

第3図 あなたは就職するにあたって男性と同等の業務を希望しますか (%)

| | 是非やりたい | できればやってみたい | どちらともいえない | あまりやりたくない | 絶対やりたくない | 欠測値 |
|-----|--------|------------|-----------|-----------|----------|------|
| 4期生 | 6.3 | 28.9 | 22.4 | 34.9 | 6.9 | ←0.5 |
| 5期生 | 4.7 | 27.8 | 27.3 | 33.4 | 6.6 | ←0.2 |
| 6期生 | 7.0 | 27.9 | 25.3 | 33.4 | 6.3 | ←0.1 |
| 7期生 | 5.7 | 30.2 | 24.8 | 32.7 | 6.7 | ←0.0 |

を発表した。これによると、1987年9月現在、上場企業233社中コース別雇用管理を導入している企業は27%、導入を検討中の企業が49.3%に達しているが、「総合職」についている女性は総合職全体の0.9%に過ぎなかった。1989年5月には、総合職の女性の数は、1年8か月前に比べ42%増加、この間の総合職の定着率は9割で、1割が結婚、出産などで退職しているという。総合職の女性のいる企業の91%が「配置に際し、女性であることの特性について、一応考える」としている。女性の総合職への進出はなお前途多難というべきであろうか。

4. 講義や教師に対する意識

(1) 講義に対する意識

この調査では、講義や教師に対する意識を把握するため15問の質問を用意したが、そのなかで講義に対する意識をみるために用意された質問は「他の短大にない独特の講義があるのでよい」「本学の講義はつまみすぎだ」「本学の講義は社会に出てから役立つものが多い」「教育機器やコンピュータを講義にもっと利用してほしい」である。これらを通じて、学生の本学の講義に対する受け止め方や要望をみることができる。ここでは、「他の短大にない独特の講義があるのでよい」と「本学の講義は社会に出てから役立つものが多い」についての回答結果をみてみることにしたい。まず、第4図に、独特の講義があると評価しているかどうかを掲げる。

これによると、この設問に肯定的な回答が否定的な回答を上回ったのは、第1期生のみで、次第に肯定的回答が減少している。これは、専攻別にみた場合、肯定的な回答がHにおいて圧倒的

第4図 他の短大にはない独自の講義があるのでよい(%)

| | (非常に) | (やや) | (どちらともいえない) | (あまり) | (全然) |
|-----|-------|------|-------------|-------|------|
| 1期生 | 8.0 | 37.1 | 27.0 | 19.4 | 8.4 |
| 2期生 | 8.4 | 24.7 | 29.1 | 29.4 | 8.4 |
| 3期生 | 5.6 | 26.7 | 35.3 | 22.9 | 9.5 |
| 4期生 | 10.4 | 25.4 | 25.4 | 28.6 | 9.9 |
| 5期生 | 5.5 | 23.8 | 28.6 | 30.6 | 11.5 |
| 6期生 | 6.6 | 20.3 | 28.2 | 30.5 | 14.2 |
| 7期生 | 9.7 | 21.1 | 31.5 | 28.5 | 9.2 |

に高いところから、開学当時には本学以外に秘書科をおく短大が少なく、後に類似校が増えたことが影響しているのかもしれない。それは、類似校の比較的に多いJやAの過去4年間の回答に否定的な意見が多いところからもうかがえる。今後の短大教育において、どのような特徴を備えるかは今後の重大な課題であるが、単に独特の講義があるというに止まらず、大学の個性化が図られなければならないであろう。

次に「社会に出てから役立つ」講義が多いかどうかについての認識は、第5図に掲げた。

第5図 本学の講義は社会に出てから役立つものが多い(%)

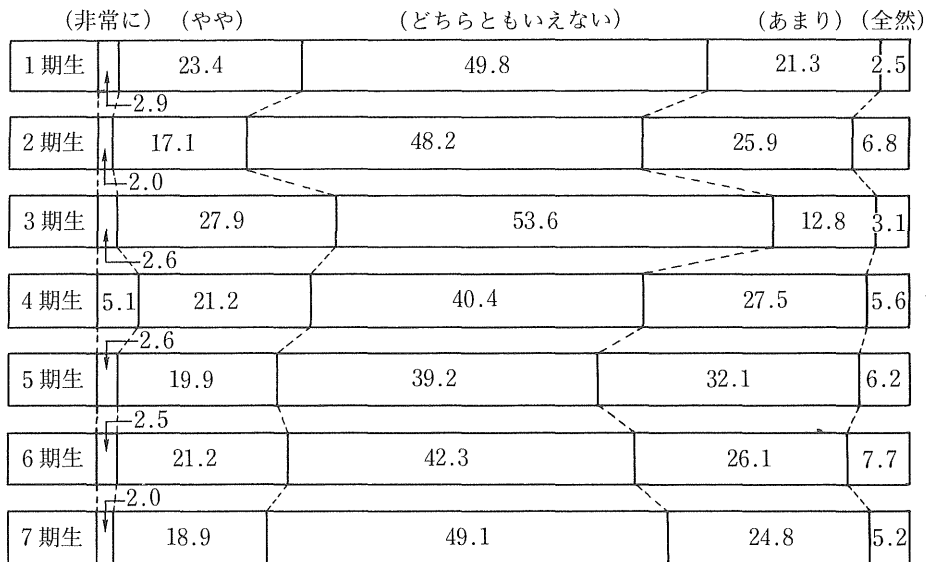
| | (非常に) | (やや) | (どちらともいえない) | (あまり) | (全然) |
|-----|-------|------|-------------|-------|------|
| 1期生 | 4.6 | 27.2 | 26.4 | 29.3 | 12.6 |
| 2期生 | 4.0 | 25.4 | 34.1 | 28.2 | 8.3 |
| 3期生 | 10.2 | 32.7 | 31.6 | 22.6 | 2.9 |
| 4期生 | 4.9 | 28.6 | 31.0 | 29.1 | 6.3 |
| 5期生 | 4.1 | 25.8 | 33.4 | 29.5 | 7.3 |
| 6期生 | 5.8 | 24.8 | 30.7 | 28.3 | 10.1 |
| 7期生 | 4.4 | 27.0 | 30.5 | 29.5 | 8.7 |

これによると、肯定的意見が否定的意見を上回ったのは、第3期生のみである。本学全体として肯定的な意見が少ないのは、学科によって科目の性質が異なるからである。ちなみに、これを専攻別にみると、HとJに肯定的意見が多く、NとAに否定的意見が比較的が多い。これは、学科の性質上、経営学科に実学的なものが多いところからくる当然の帰結であろう。肯定的意見と否定的意見のバランスは、ここ4年間はほとんど変わらず同じ傾向を示しているところから、専攻別の評価は、ほぼ定まったとみるできであろう。

(2) 教師に対する意識

教師に対する意識をはかる質問は「本学の先生の指導はとても親切でわかりやすい」「講義時間中にうるさい人には先生がきびしくすべきだ」「本学には気に入らない先生が多い」の3問が用意された。7年間の回答結果は、それぞれ、第6図、第7図、第8図に掲げたとおりである。まず、「本学の先生」の指導ぶりについて学生がどのように評価しているかについてみてみよう。

第6図 本学の先生の指導はとても親切でわかりやすい(%)



第6図によると、本学の先生の指導を「親切でわかりやすい」と肯定的に答えたものが否定的なものを超えているのは1期生と3期生のみで、他の期はすべて否定的な回答が多い。しかし、各期とも、「どちらともいえない」が圧倒的に多く、これを教師の指導ぶりを「普通」と感じていると解釈すれば、各期とも6割以上のものが好意的な意見であるとみることもできる。

これを専攻別にみると、期によって多少の入れ代わりがあるが、総体的にみてN、Aに肯定的意見が多く、J、Hに否定的な意見が多い。これは、経営学科の科目には、高校時代のカリキュラムになかった専門的知識や技能を必要とするものが多いことと関連するとみることができる。

第7図 講義時間中にうるさい人には先生がきびしくすべきだ(%)

| | (非常に) | (やや) | (どちらともいえない) | (あまり) | (全然) |
|-----|-------|------|-------------|-------|------|
| 1期生 | 20.5 | 30.1 | 28.9 | 15.5 | 5.0 |
| 2期生 | 21.0 | 31.3 | 27.8 | 17.1 | 2.8 |
| 3期生 | 10.5 | 36.3 | 34.3 | 15.8 | 3.1 |
| 4期生 | 30.9 | 31.0 | 21.7 | 12.7 | 3.7 |
| 5期生 | 30.7 | 33.9 | 23.3 | 10.0 | 2.1 |
| 6期生 | 22.5 | 35.2 | 26.7 | 12.1 | 3.5 |
| 7期生 | 22.8 | 34.3 | 27.3 | 13.7 | 1.8 |

第8図 本学には気にいらぬ先生が多い(%)

| | (非常に) | (やや) | (どちらともいえない) | (あまり) | (全然) |
|-----|-------|------|-------------|-------|------|
| 1期生 | 6.3 | 13.4 | 45.2 | 28.9 | 6.3 |
| 2期生 | 28.4 | 45.6 | 19.6 | 2.8 | 3.6 |
| 3期生 | 17.7 | 37.6 | 35.3 | 7.1 | 2.3 |
| 4期生 | 5.8 | 18.0 | 36.9 | 32.3 | 6.9 |
| 5期生 | 5.9 | 18.2 | 34.6 | 35.1 | 6.2 |
| 6期生 | 15.9 | 38.2 | 34.3 | 7.0 | 4.4 |
| 7期生 | 14.6 | 40.0 | 35.5 | 5.9 | 4.0 |

今後の指導にあたっては、学生がこれらの科目に興味をもち、学習意欲を高めるようなお一層の工夫を加える必要がある。

次に、第7図は講義時間中の私語に対する教師の対応を聞いたものであるが、各期とも厳しい対応を求めている。特に4期生、5期生の場合は6割以上が積極的に求めているのが目立っている。6期生、7期生が5割代に低下しているのは、いろいろな対策によって、講義時間中の私語がやや減少したことを反映しているものとみることできるが、なお15%程度のものが厳しさを要求していないのは、少し位の私語はかまわないとの甘えが残っているものと推測することができる。講義中の私語は、真面目な学生の聴講に多大の迷惑を与え、教師の指導意欲を阻害するものであるから、その絶滅を期して、一層厳しい態度をもって臨むべきである。この調査においてこのような質問が不要となる時が必ず到来することを期待したい。

最後に、本学の先生に対して学生が一般的にどのような印象をもっているかを知るために設けた質問に対する回答結果を第8図に掲げた。これによると、「気にいらぬ先生が多いと思う」ものが「そう思わない」ものを上回ったのは第2期生にみで、その他の期ではいずれも「そう思わない」ものが圧倒的に多い。さらに（どちらともいえない）と回答したものを加えると、第2期生を除いて、各期とも70%前後の学生がこの質問を肯定していないことになる。この結果は大部分の学生が先生に好意的な印象をもっているとみてよいと思われる。

「気にいらぬ」という抽象的な表現のためいろいろな意味にとられていると思われるが、小数ながらこれを肯定するものがあるということは、その原因が何であるかが問題である。「気にいらぬ」とは感情的側面をとらえようとするもので、もともと論理的に突きつめることは困難である。今後の調査においては、この問いを別の形に置き換えることによって、少しでもその理由を把握できるよう検討されることを期待したい。

5. ま と め

以上、本学の学生に対するアンケート調査のうち、意識調査にかかる部分の7年間の結果をみてきたが、これを総括すると次のようにまとめることができる。

- (1) 本学への志望動機についてみると、期により若干の変動があるにしても、希望する学科のあることと推薦入学制度のあることが、主たる動機であることがわかった。
- (2) 大学生活への満足度については、多少の出入りはあるが、着実に増加していることがわかった。
- (3) 学生が最も生き甲斐を感じるものとして、7年間「友人との交際」が首位を占め、変化は認められなかった。
- (4) 男女の役割については、「男は外で働き、女は家を守るべきだ」という意見に、賛成する

ものは、明らかに減少しており、反対を表明するものが激増していることが読み取れた。

- (5) 就業予想年数については、「結婚まで働く」が各期とも第1位を占め、職業生活よりも家庭生活を優先する意向の強いことを示しているが、その反面、「子供が生まれても働く」が第5期以降、倍増に近い数値を示している事実があった。
- (6) 職業の選択についてみると、学生に人気のある業種は、製造業、卸・小売業、観光・旅行業、証券業であり、希望職種は一般事務が圧倒的多数を占めていることがわかった。
- (7) 男性と同等の職務を望むかどうかについては、消極派が積極派を上回っているが、消極派が徐々に減っていく傾向を示しており、職業意識の高まりを読み取ることができた。
- (8) 講義に対する意識は、本学に独特の講義があることを肯定する意見は減少し、社会に出て役立つものが多いかどうかについて、肯定的意見と否定的意見のバランスは、ここ4年間同じ傾向を示していた。
- (9) 教師に対する意識は、本学の先生の指導を親切でわかりやすいと肯定するものは必ずしも多くないが、「普通」と感じているものを加えると、6割以上のものが好意的意見であるともみることができる。また、講義時間中の学生の私語について、各期とも教師の厳しい対応を求めている。なお、大部分の学生は、本学の先生に好意的な印象をもっているものと思われる。

以上で、本稿を終わるが、各項目の詳細については、次の各報告書を参照されたい。

- 「城西大学女子短大生の意識構造」(1985年1月 城西大学女子短期大学部紀要第1巻)
- 「昭和60年度共同研究 城西大学女子短大生の意識構造」(1986年3月)
- 「昭和61年度共同研究 城西大学女子短大生の意識構造」(1987年3月)
- 「昭和62年度共同研究 城西大学女子短大生の意識構造」(1988年3月)
- 「昭和63年度共同研究 城西大学女子短大生の意識構造」(1989年3月)
- 「平成元年度共同研究 城西大学女子短大生の意識構造」(1990年3月)
- 「平成2年度共同研究 城西大学女子短大生の意識構造」(1991年3月発行予定)